



町内会の枠を超えた防災対策



札幌市南区澄川地区連合会
会長 石川 誓志

1 私たちの地域

澄川地区は、明治15年、現在の福岡県からの入植によって開拓が始まり、林檎畑や田園が広がる農村地帯でした。

昭和35年に民間宅地分譲が活発になり、札幌冬季オリンピック開催の前年、昭和46年12月地下鉄南北線の開通は人の流れを大きく変え、大型スーパーや飲食店、マンション建築が相次ぎ、澄川の街並みは大きく変貌しました。

札幌都心から8キロ圏内の澄川は、人口約2万9千人、世帯数約1万6千世帯、町内会加入率68.9%で地域活動が盛んな街です。

2 地勢と防災対策

南北に長い地形の澄川は、東は急勾配の傾斜地や崖地を有する丘陵地、西は地下鉄高架が縦断（澄川地区分断のおそれ）し、老朽建物や中低層建物が密集する繁華街を有する平坦部で、生活道路は狭隘かつ複雑、さらに様々な地質が混ざり合った環境にあります。

当時、地区の著しい高齢者の増加と相俟って、大規模地震発生時には甚大な被害が懸念されることから、自主防災組織の必要性を痛感した連合会長は、傘下の13町内会に自主防災組織の結成を呼び掛けるとともに、連合会に防災対策本部を設置し、平成10年4月に全町内会に自主防災組織が結成されました。

同年9月、連合会が主催する地域主導の総合防災訓練を初めて実施し、以来、連合会が中心となって、関係機関との調整その他防災に関する企画立案を行い、地域ぐるみで防災活動を展開してきました。

3 災害への備え

連合会は、町内会組織の他に民生児童委員や青少年育成委員、暴力追放運動推進協議会、交通安全運動推進委員会などの地域活動団体と一体化した組織形態をとり、敢えて連合町内会と呼ばないで「澄川地区連合会」の名称を用いて、緊急時には臨機応変な対応が可能な組織体制としました。

防災資機材について、澄川地区3小学校区内に防災倉庫を設置するとともに、可搬式消防ポンプやエンジンカッター、チェーンソー、投光器、ヘルメットなどの防災資機材を各倉庫に分散配置しています。また、当時先進事例として紹介されましたが、防災用無線機を導入し、連合会防災対策本部と各町内会への配置体制を整え災害に備えています。

4 自主総合防災訓練

自主防災組織結成後は、毎年約400人が参加する大掛かりな防災訓練を実施し、主婦や中学生も多数参加しています。今年も煙道体験訓練や心肺蘇生・AED操作訓練をはじめ、可搬式消防ポンプを活用した放水訓練、消火器（水）による初期消火訓練な



AED・心肺蘇生



煙道体験



レスキューキッチン



放水体験

ど、本番さながらの内容で実施しています。

特に男子中学生は、学校と相談して訓練開始時から参加しており、男手が不在となる日中の貴重な戦力になることを想定し、日頃の防災訓練の体験を通して、災害時に防災意識の高揚につながることを期待しています。

様々な防災訓練の中で、澄川の特徴として炊き出し訓練を実施しています。野外で炊飯や豚汁などを調理出来る「レスキューキッチン」を配備し、日赤奉仕団澄川分団と女性部の協力を得て炊出しを行い、参加者全員の試食に供しています。

豚汁の具材は、野菜や肉をはじめ、豆腐、こんにゃくを早朝から仕込んできましたが、最近では野菜について、乾燥処理した「乾燥野菜」を使用しており、調理の手間が省け、野菜の味が濃く、おいしくいただけると好評です。乾燥野菜は「軽くて、長持ちして、気軽に活用でき、災害時の非常食材」として注目されており、乾燥野菜の推進を通し

て、防災のまちづくりを進める地域団体「澄川乾燥野菜推進委員会」が提供しています。

なお、このレスキューキッチンは防災訓練にとどまらず、冬まつりなど連合会主催のイベント会場においても、日赤奉仕団と女性部が協力して、来場する住民に無料提供する豚汁などの調理に活用されています。

5 今後の取組

結びに、自主防災組織を結成して早や19年を迎えます。この間、高齢社会の到来や町内会加入世帯の減少など、連合会や各町内会を取り巻く環境は大きく変わり、そこに住む住民の世代交代も進み、これまで培ってきた住民の防災意識も大きく変化しています。

最近の異常気象に起因する災害対応は非常に難しさを伴いますが、今後も各町内会と連携をとって、町内会の枠を超えた住民の安心・安全の防災対策を継続していきたいと強く望んでいます。



防災訓練開会式